



アリスギアマガジン 読者参加型シナリオ

霞ヶ浦のサンセット

—アリス・ギア・アイギス外伝—

第八話 「鬼の目にも」

《「絶望感と一筋の希望」といったドラマチックな演出》を
選択

◆美術準備室

漣音

「うん。観客を全員泣かせるくらい、ドラマチックな演出に仕上げよつと！」

漣音は方向性を決めると、そこから先は迷わなかった。

優陽が、調が、奥井が、泰介が、そしてみちるが全ての力を出し切ってくれた。

あとは最後に自分の全力をぶつけるだけ。

ただそれだけを思い、シーンを繋げていく……

そして、文化祭はあっという間にやって来て、いよいよ映画研究部の作品が公開される日を迎えた。

◆ 体育館

みちる 「もう勝てないよ！ 私は……ううん、私達はみんな、ヴァイスに滅ぼ

されちゃうんだよ！」

優陽 「それは違うよ、みちるちゃん。みちるちゃんが歌ってくれば、絶対に勝てるんだよ！」

みちる 「そんなの、嘘だよ……それに私が歌うなんて、無理だよ……」

体育館のスピーカーを通して響き渡る、演者達の声。

前方のスクリーンに映し出されていたのは、彼女達の熱演。

そのドラマチックな展開と演出に、会場からは時折鼻をすする音が響いていた。

◆体育館
舞台袖

泰介 「スゲー！ みんな泣いてるじゃん！」

滯音 「声が大きいよ、泰介！ もっと抑えなさいよ！」

泰介 「悪い悪い。ついな」

大した反省の色もない泰介に、滯音は不満足な表情を浮かべていた。

優陽 「でも良かった〜 脚本担当として、まずはホッとしたよ〜」

調 「良い脚本が正しく評価された証だな、うん」

優陽 「ううん、しべちゃんの音楽も大きいよ！ このシーンであの曲は反則だもん！」

奥井 「確かにシーンの内容と相まって泣ける曲だね。相乗効果が半端ないよ」

調 「嘘をつけない奥井の褒め言葉は染みるな。素直に喜んでくよ」

泰介 「それにしても、スゲー観客だな」

再び、泰介が舞台袖からこっそりと観客席を見渡す。

優陽 「志保ちゃんのお陰だね！ この前テレビに出たとき、宣伝してくれ
たから」

◆アクトレス番組

先日、地方局で放送されたアクトレスの情報番組に、志保が出演していた。

司会者 「これでインタビューは終わりです。最後に何かありますか？」

志保

「えっと、後輩がアクトレスの映画を作ったらしいので観に来て下さい」霞ヶ浦の裏中学校の文化祭で」

志保は用意周到に作成したフリップを掲げた。

そこには文化祭の日程や『命を掛けて戦うアクトレスと夢を追う少女の物語！』というキャッチフレーズがデカデカと書かれていた。

◆体育館

舞台袖

調

「まさかインタビューの最後にぶち込んでくるとは、さすがの私も呆氣にとられたよ。まあ、志保さんらしいけど」

漣音

「わたしもテレビ観ていて、冷や汗かくとは思わなかったわ」

みちる

「私は笑ってしまいました」

漣音

「みちるって、一度肝が据わると強いわね……」

優陽 「でもありがたいよねー」

みちる 「うん！」

映研メンバーが志保に向けた感謝の想い(?)について話していると、映画はラストシーンへさしかかろうとしていた。

奥井 「この後のシーンが良いよね。稲葉さんの突撃と真島さんの歌を、効果

的なランジションで入れ替えてさ。凄くドラマチックな演出になってるよ」

みちる 「あ、あそこの男の人も泣いてる……」

調 「ああ、最高の演出だな。大成功だよ、滯音！」

優陽 「うん！ さすが滯音ちゃんだね！」

奥井 「今年の演出は今まで観てきた映画の中でも、最高のものだよ」

滯音 「ま、待ってよ！ わたしだけじゃなくて、みんなのお陰だってば！

優陽のホンも、しべの曲も最高だよ！」

次から次へと畳みかけるように滯音の演出を褒める部員達に、滯音は真っ赤になって反論した。
すると優陽は突然俯き、自分を抱きしめるように両肩をギュッと握りしめた。

優陽

「……うつっ」

調

「……優陽？」

優陽

「まだ、泣くのは早いよね……だけど、うつっ……もうだめだあ！」

映画制作の苦労が報われ、部員達がそれぞれを称え合う現状に、優陽は感極まって泣き出してしまう。

そして、優陽の頭の中に、映画制作中の出来事が次々と蘇ってきた。

◆映画研究部部室

優陽 「あたし、アクトレスの映画を撮りたい！」

◆霞ヶ浦湖畔

滯音 「……自信、ないの？」

優陽 「自信なんて最初からなかったのかな、って」

調 「それって映画の脚本のこと？ それともアクトレスのことを好きな気持ち？」

優陽 「……どっちなのかさえ分からない、かも。ホンが進まなくて……それってもしかしたらアクトレスのこと、実はそんなに好きじゃないからなのかなって……」

滯音 「なるほどー。これは少し重症だあ」

◆ショッピングセンター

優陽 「それじゃあ、せーので開けるよ！」

三人 「「せーの！」」

滯音 「えっ！？ 適正アリ！？」

調 「私もアリだ」

滯音 「優陽は……？」

優陽 「……………」

滯音・調 「「あ……………」」

優陽 「…………あたし…………ダメ、みたい…………」

◆ショッピングセンター

志保 「あはは、調の言うとおりだね。だけど優陽がそのつもりなら、わたし

はそれまでアクトレスを続けられるように頑張るさ」

優陽 「うん！ 絶対だからね！」

漣音 「うつつ……」

志保 「おいおい、漣音。いつも強気なくせに、泣き虫なところは昔から全く変わらないな」

漣音 「うつつ……ごめんなさい……うう……」

◆学校の裏山

みちる 「うう……」

優陽 「ちよつと声が小さかったけどさ、演技は凄く良くなったよ」

みちる 「ううん……わたしなんか全然ダメだよ……何回やってもうまくいかなくて……」

◆映画研究部部室

松井 「脚本を読んで感じたことがある。稲葉は、本当にアクトレスが好きな

のか？」

優陽 「え……？」

松井 「どうなんだ？」

優陽 「……………」

◆優陽の自宅

みちる 「あゝ、えゝ、いゝ、おゝ、うゝ」

優陽 「……みちるちゃん？ 発声練習してるんだ……あたしも頑張らない

と!!」

◆霞ヶ浦湖畔

漣音 「カァット！ いいよ、みちる！ 最高だった!!」

みちる 「ホントに？ 良かった」

優陽 「あたし、鳥肌立ったよ」

調 「ああ、私もだ」

奥井 「……動画もオツケーかな？」

漣音 「うん、大丈夫！」

優陽 「それじゃあ……」

泰介 「うおー、来たか！」

漣音 「……これでクランクアップ、ですっ!!」

一同 「「うおーっ!!」」

◆体育館
舞台袖

次々と蘇ってくるこの数ヶ月の出来事に、優陽の目から涙が溢れかえってくる。

優陽
「うっっ……うっー」

ボロボロと涙が止まらない優陽。

滯音
「やだ、やめてよ優陽……うっ……」
調
「……………」

優陽につられるように、滯音、そして調も目を拭いた。

泰介
「あれ？ 調も珍しく泣いてる？ 鬼の目にも涙？」

ゴン！

泰介

「イテエ！」

鈍い音が辺りに響き渡った。

どうやら泰介の目にも涙が溢れてきたようだった。

◆体育館

みちる

「♪キミが誓った約束を今胸に抱いて　ボクはきっと明日へと歩きだすから　キミを迎えに行くために」

映画はクライマックスを迎え、歌を歌っていたみちるから優陽へとクロスフェードする。

優陽

そしてアップになった優陽が、宇宙空間の中で敬礼する。

「任務、完了！　これから帰還します！」

人類を救った英雄に向け、大歓声が沸き起こっていた。

その後、画面は再びゆっくりとみちるヘクロスフェードする。

そして、カメラは退きながらみちるの背中に回り込み、湖に沈む夕陽と共に映画のタイトルである『霞ヶ浦のサンセット』と表示され、映画が終了した。

体育館が明るくなるや否や、観客が一斉に立ち上がり、割れんばかりの拍手が巻き上がった。

◆映画研究部部室

泰介 「うおーーーーっ！」

優陽 「やったーーーーっ！」

体育館での余韻そのままに、勢いよく部室内に戻ってくると、各々がこれで最後となる馴染みの席に座った。

漣音 「ふう……やっと終わったわ……」

調 「んゝ、開放感ゝ」

優陽 「大好評だったねー！」

奥井 「うん、スタンディングオベーションだったよ！」

泰介 「オレ、マジで鳥肌だったぜ！」

みちる 「私、感動しましたゝ」

そして、最後に顧問の伊藤菜澄那が部室に入ってくると、教壇に登って部員達一人一人の顔を見た。

菜澄那

「みなさん、今日までお疲れ様でした。今年は特に素晴らしい作品になっていたと思います。それは観客の拍手からみんなも感じていたと思います。今日はその余韻に浸って、まずは心身共にゆっくりと休んで下さい」

菜澄那は興奮冷めやらない部員達に、労いの言葉をかけた。

今の興奮が冷めれば、疲れが一気に押し寄せるだろう。それを見越しての言葉でもあった。

優陽

「はいっ、先生！ あたしからも良いですか!？」

菜澄那

「稲葉さん、どうぞ」

菜澄那からの許しを得ると、優陽は席を立って菜澄那と入れ替わるように教壇に立った。

優陽

「まずはみんなに御礼を言うね。本当にありがとう！」

優陽はぺコツと頭を下げた。

優陽

「あたしのワガママでアクトレスの映画を撮ることになって、それなのに途中で投げ出しそうになって……でも、みんなのお陰でとても良い作品……ううん、メッチャ凄い作品になりました！」

泰介

「まあ、ぶっちゃけ、オレのおかげ？」

お調子者の泰介がツツコミ待ちの発言を放つ。

すると待ってましたとばかりに、部員達から一斉にツツコミが返ってきた。

漚音 「茶々しかいれてないクセに良く言うわ」

泰介 「監督様の厳しい要求に、小道具も作りまくりましたぜ！」

漚音 「ホントかしら？　どうなの、奥井君？」

奥井 「まあ、頑張ってくれた方だと思うよ」

泰介 「先ぱゝい！　オレ、かなり頑張りましたよゝ」

優陽 「奥井君から聞いたよ。ラストシーンの大型ヴァイス、作ったの泰介な
んでしょ？　あれ、凄く良い感じだった！」

漚音 「えっ!?　そうだったの!?　すっかり奥井君が作ってくれたもんだと
思ってた！」

泰介 「せ、先輩！　言わないでくれって言ったのにゝ」

奥井 「あはは、ゴメンね、つい。だけどね、迷惑掛けた稲葉さんのためにっ
て、気合い入れて作ってくれたんだよ」

泰介 「だから恥ずかしいこと言わないでよ、先輩！」

調 「へえ。それがホントなら、奥井の後釜を見事に引き継げそうだな」

漣音 「わたしも安心したわ。みちるに部長を引き継がせようかと本気で思っ

てたけど、まあ、アンタでいいわ」

泰介 「まあ、ってなんだよ!」

みちる 「頑張ってください、新部長!」

泰介 「お、おう……」

カワイイ後輩から声を掛けられて、真っ赤になる泰介。

漣音はそんな泰介を観て、心の中で爆笑していた。

優陽 「最後になるけど、あたしはみんなと一緒に映画が作れて、凄い幸せ

者です! 本当にありがとう、みんな!」

改めてペコッと頭を下げる優陽。

優陽 「それじゃ、最後に漣音ちゃん!」

優陽は頭を上げると、滯音に教壇に上がるように促した。

滯音

「そ、そうね……」

滯音と優陽が入れ替わる。

滯音

「なんとか今日まで映研の部長としてやってこられました。これもみんなのおかげです」

調

「固いぞ、滯音」

滯音

「うっさい、しべー！」

茶々を入れる調の言葉を真に受けて真っ赤になる滯音だったが、まだ部長としての最後の挨拶の途中だったので、すぐに気持ちを切り替えた。

漚音

「コホン……でもホントにこのメンバーだからこそ、あの素晴らしい映画、『霞ヶ浦のサンセット』を創りあげることができました。あの映画は、ここにいるメンバー、全員の誇りです！」

漚音の言葉に応えるように、部員達は一斉に拍手する。

漚音

「でも三年生がいなくなっちゃうと、泰介とみちるの二人になっちゃうわね」

みちる

「あ、それなんですけど」

みちるが手を上げて席を立つ。

みちる

「ここに戻ってくるときに友達から声を掛けられて、映画に凄く感動してくれたみたいで、三人増えるかもしれないです」

澤音

「えっ、本当に!？」

優陽

「凄いよ、みちるちゃん!」

調

「でかした、みちる!」

思っていたよりも大きな反応に、みちるは真っ赤になりながら両手を前に出してフルフルと振った。

みちる

「わ、私は凄くないよー あの映画が凄いからで……」

優陽

「でも、あの映画の主演女優はみちるちゃんだよ! みちるちゃんの歌と演技が良かったからこそ、ウケたんだよ!」

調

「だな」

みちる

「ううっ……」

今度は反論せずに、只ひたすら真っ赤になって照れるみちる。みんながみんなを称え合い、『照れ』のバトンを繋いでいた。

みちる

「そ、そうだ！ 泰介君！」

泰介

「お、おう……」

みちるが自分をひたすら上げまくる部員達の言葉を遮るように、泰介の名を呼んだかと思いきや、泰介はみちるの呼びかけに応えるようにカバンから何かを取り出した。

そしてみちるに何かを渡したあと、二人は教壇へと向かった。

優陽

「えっ、二人も何か話す？」

みちるは首をフルフルと振ると、教壇の下で足を止めた。

話し出したのは泰介の方だった。

泰介

「えっと、一応、今後はオレが部長になるみたいなので、その引き継ぎと言いますか……」

泰介には珍しく敬語で、照れながら言葉を紡いでいた。

泰介

「三年生への御礼と思って、みちると一緒に買ってきたものがあります」

滯音

「な、なに!?　なんか、怖いわね……」

泰介は壇上の優陽に、みちるは席に座っている滯音と調に葉書程度の大きさの紙袋を渡した。

そして、泰介は一旦教壇を降りると、奥井にも同じ物を渡した。

優陽

「……開けていい?」

代表して優陽が聞いた。

泰介

「お、おう……」

三年生が一斉に紙袋の中にあるものを取り出すと、入っていたのは合格祈願のお守りだった。

みちる

「この前、泰介君と鹿島神宮に行って買ってきました」

漣音

「そんな遠くまで!？」

鹿島神宮は茨城シャードで一番大きな神社だった。

霞ヶ浦の裏中学に通う地域では、数年前にローカル電車が廃線になってしまっていたため、鹿島神宮に出るには最寄り駅まで自転車で1時間以上、そこから更に電車で30分掛ける必要があった。

泰介

「大きな神社の方が御利益あるかな、ってさ」

調

「……全く、驚かされたよ。来年から二人つきりでどうなるかと思ったけど、人数も増えるみたいだし、これで安心だな、漣音」

澤音 「……そうね。まだ心配は尽きないけど、とにかく任せたわよ、泰介！」

泰介 「おうよ！ 『霞ヶ浦のサンセット』以上の作品を作ってやらあ！」

奥井 「ボクも楽しみにしてるよ、二人とも」

優陽 「うん！ 絶対に観に来るからね！」

こうして三年生にとって最後の部会は終わった。

◆霞ヶ浦湖畔

未だに映画公開の余韻も、そして最後の部会の興奮も冷めやらぬまま。

三人は霞ヶ浦湖畔の公園にある馴染みのベンチに座った。

優陽 「やー、終わっちゃったねー」

指を絡ませた両掌を湖に向けてグッと伸ばす優陽。

漣音

「わたしもやっと肩の荷が下りたわ」

調

「そうだなあ。なんだかんだ言いながら、三年生になって中心となって作った作品だから、思い入れも深いしな」

漣音

「深すぎるわよ。もう映画監督は懲り懲り」

調

「って言いながら、いつかまたやりたくなるんじゃないか？」

漣音

「うーん、そうなのかなあ」

苦笑いを浮かべる漣音。

『懲り懲り』とは心底から出た言葉だったが、調の言うことも完全に否定できないような気がしていた。

優陽

「あたしはいつかまた『ホン』書いてみたいな。アクトレスをテーマにしてー」

漣音・調 「……………」

優陽はその言葉に何も含んだつもりはなかったが、漣音と調は敏感に受け取ってしまい、体が強ばってしまう。

優陽 「え、なに？ あたし、もう大丈夫だよ？ むしろ、今はアクトレスを

別の視点でみれてるし」

左右から感じた違和感を否定するために、強がりでもなんでもなくごく普通に話したつもりだったが、それがむしろ変に気にしているような言い回しになってしまった。

優陽 「……ううん、それは嘘かなあ。やっぱりほんの少し、意識しちゃって

いるかも」

自分は何も気にしているつもりはなかった。

ただ言葉にすると空気が淀んでしまう。

それを今、優陽も自覚した。

調

「そうか……うん、そうだな」

滯音

「……とにかく今はまず受験のことを考えないと。一生懸命勉強して、志保さんの装備、作るん……」

『作るんでしょ?』と言っている途中で、優陽のスマホから着信音が聞こえてきた。

以前にもこんなことがあったような気がして、滯音も言葉を途中で止めてしまう。

滯音や調も期待するその着信を確認するため、優陽はスマホをカバンから取り出し、画面を確認した。

優陽

「あ、志保ちゃんからだ」

なんとなく三人とも志保からのメッセージではないかと予想していた。手慣れた操作でスマホのロックを解き、メッセージアプリを立ち上げ、志保からのメッセージを確認する優陽。

左右に座っていた滯音と調も横から覗き込む。

優陽も二人に見えるように、少し体からスマホを離してメッセージを読んだ。

そこにはあまりにも衝撃的なことが書かれていた。

『エミッション値ってピークの年齢は人によって違うんだよね』

滯音

「ええっ!？」

『なんか、もう上がることがないって思い込んでいるみたいけどさ、
そもそも人によっては一日の中で大きく変動する人もいるらしいよ?』

調

「ちよっ!」

『ってなわけで、もう一度適性検査を受けてみるのも良いんじゃない?
い?』

優陽

「……そんなあ! もう、気持ちを整えていたのに」

三人

「『』どうして早く教えてくれないの」

三人の心の叫びをそのままメッセージに変換して志保に送信する。
すぐに志保から返信メッセージが届いた。
それを見て三人は一気に脱力した。



『だって、その方がドラマチックっしょ！』

優陽

「うゝ」

滯音

「志保さん……」

調

「ごりゃ、してやられたな、はは」

体をダランとベンチに投げ出し、三人は沈む夕陽を眺めた。

しかし緩みきっていたその時、再び志保からメッセージが届く。

『でも、実際に優陽のエミッション値が上がるという保証は全くないよ。それどころか確率は極めて低いと思う。それでも、もう一度検査を受ける勇気があるなら、今度の休みにウチの事務所において』

優陽

「……っ！」

そのメッセージは緩んでいた気を一気に引き締めるものだった。
優陽だけでなく、その隣にいた滯音と調も。

優陽

「……………」

優陽はスマホから目線をあげ、背筋をピンと伸ばして霞ヶ浦の夕陽を見つめた。

今日の夕陽は、様々な顔を持っていた。

時に優しく、時に厳しく。

そして今は……

優陽

「何も知らずに幸せに生きるより、残酷な真実を知った方がマシだね！」

優陽はもう一度アクトレス検査を受ける覚悟を決めた。

漑音

「わたし達も一緒に行っていい？」

優陽

「……もちろん！」

次の日曜日の予定は決まった。

志保のアクトレス事務所がある土浦へ向かう。

優陽の未来を確認するために。

◆土浦

アクトレス事務所

日曜日になり、志保が所属するアクトレス事務所にやってきた三人。

優陽だけ事務所の奥へと案内され、漑音と調は応接室に通された。

落ち着かない漑音を調がなだめながら待っていると、40分後に優陽が応接室に入ってきた。

漣音

「どうだった？」

漣音と調は同時に立ち上がった。

しかし優陽はうつむき加減で、あまり良くない結果だったことをほのめかしていた。

優陽

「ボーダーラインスレスレだった」

漣音

「それじゃあ……」

優陽

「……うん。難しいだろう、って」

優陽は精一杯の苦笑いで答えた。

調

「……そうか」

それに対して調は想像通りといった笑顔で応えた。

調

「確率的に厳しいとは思ってた。アクトレスになれるのは一割もいれば良い方だって聞いたことがあったからな」

漣音

「え、そうなの？」

志保

「調の言うとおりだよ。わたしだけじゃなくって、調と漣音も適正アリってこと事態、驚くべきことなんだ」

漣音

「だけどよりによって……」

『優陽だけ適正無いなんて』と言おうとして言葉を止める漣音。

最後まで言葉を発すれば、優陽を確実に傷つけると思ったからだ。

優陽

「ううん、でもこれでスッキリしたよ。あたしは整備士になる。そのために受験勉強、頑張らないとね！」

澤音の言いたいことを察して、優陽は少しだけ強がった。

だけど、その強がりには自分の心の整理を付ける意味合いもあった。

せっかく土浦まで出てきた三人だったが、この日は寄り道せずに帰宅した。

◆職員室

土浦に行ってから数日が経過したある日の放課後。

菜澄那 「あ、稲葉さん！」

菜澄那は職員室にやってきた優陽の姿を見て、手を上げて自分の席へと誘導した。

優陽 「失礼します」

優陽は帰りのホームルームで菜澄那から「後で職員室に来るように」と呼び出されていた。

一言断りを入れて、職員室に入る優陽。

菜澄那 「呼び出したのは他でもないわ。希望校、どうするの？」

優陽 「……………」

菜澄那 「進路希望を出していないの、稲葉さんだけなの」

優陽 「すみません……………」

進路希望の提出は昨日が締め切りだった。

特に忘れていたわけではなかった優陽は素直に謝る。

菜澄那 「実はね、松本さんから事情は聞いているの」

優陽

「志保ちゃん、から？」

漣音や調が自分に黙って事情を話すようなことはないと思っ
ていたが、どうやら志保が菜澄那にアクトレス適正が足りない事実を話
していたようだった。

志保は昨年映研の部長だったこともあり、菜澄那とは卒業後も連絡を
取り合っているとは思議ではないと思陽は思った。

菜澄那

「これはね、担任としての提案なのだけれど……」

そう言うと、机の中からとあるパンフレットを取り出した。

菜澄那

「進路に悩んでいるなら、つくばに行ってみない？」

それはつくばにある高校のパンフレットだった。

優陽 「つくば……?」

菜澄那 「筑波研究学園都市の研究所でね、開発中のアクトレスギアがあるらしいの。そこのテスト生にならないかって、稲葉さんに打診が来ているのよ」

優陽 「えっ!? あ、あたしにですか!? どうして!? あたし、エミッシヨン値、足りないのに!」

想像も付かない提案だった。

職員室に入ってくるまでは、進路についてどう誤魔化そうかと考えていた。

だけど今、目の前に提示されたのは、再び夢を見る権利を持てるかもしれないという、悪魔のささやきだった。

菜澄那 「そこでは、エミッシヨン値の低い人でも扱えるギアを研究中らしいの。仕組みはよく分からないのだけど、上手くいけば稲葉さんもアク

優陽

トレスとして活躍できる可能性があるらしいわ」

「エミッション値が低くても、ですか……？」

まるで漫画のような都合の良い機能。

そんなうまい話があるのだろうか？

優陽の頭の中ではそんな疑念がグルグルと回っていた。

菜澄那

「あくまで実験段階の話らしいの。確実な保証はないわ」

優陽

「実験……」

優陽は驚きを隠せなかった。

諦め掛けていた夢に対して、降って沸いた新たな展開。

どうして素直に夢を諦めさせてくれないのか？

待っているのは天国なのか、地獄なのか。

今の優陽に判断のしようがなかった。

菜澄那

「もし少しでも興味があるのなら、明日学校をお休みしてこの『進藤』さんを訪ねなさい」

菜澄那は先ほど机から取り出した、つくばにある高校のパンフレットを優陽に差し出した。

優陽

（……ここに行けば、アクトレスになれる可能性はギリギリ残っているのかも）

優陽はパンフレットに手を伸ばした。

しかし、受け取る直前で手が止まってしまふ。

優陽

（だけどこの前土浦に行った時みたいに、結局ダメってことになるかもしれない……辛い思いをするくらいなら、このまま忘れてしまった方が幸せかも……）

【選択】 悩んだ挙げ句、優陽がとった行動は……？

《A パンフレットを受け取る》

《B パンフレットを受け取らない》